

歴代誌第一 1 - 9 章 「帰還民の系図」

1 A ダビデ家までの系図 1 - 4

1 B 族長まで 1

2 B ダビデまで 2

3 B ダビデ家 3

2 A その他の部族 4 - 8

1 B ユダ 4

2 B 東岸二部族半 5

3 B レビ 6

4 B エフライムとガリラヤ 7

5 B ベニヤミン 8

3 A 帰還民 9

本文

歴代誌第一を開いてください。私たちは列王記を前回、学び終わりました。列王記の主題をまとめますと、「主の命令に背いたので、主が彼らを裁かれた」ということでありましょう。ソロモンが晩年に主から離れて、王国が分裂し、北はヤロブアムの罪を歩み続け滅び、南はマナセの背教によって滅びました。そして歴代誌に入るのでありますが、時代的にはサムエル記と列王記を繰り返します。「えっ？ そうしたら、また後戻りするのですか？」と聞かれると思います。時代的には、はい、その通りです。けれども、視点が正反対になります。列王記は彼らが神に背き、裁かれたことが書かれていますが、歴代誌は彼らが主に立ち返って、礼拝を取り戻すことに焦点があります。

今日読むのは、1 章から 9 章です。すべて系図なので、大まかに触れるだけにします。それよりも、歴代誌全体にある流れを、初めに大観したいと思います。この書物が書かれた背景は、9 章 1-3 節にあります。「全イスラエルは系図に載せられた。それはイスラエルの王たちの書にまさしく示されている。ユダは、不信の罪のために、バビロンに捕え移されていた。ところで、彼らの所有地である彼らの町々に最初に住みついたのは、イスラエル、祭司たち、レビ人および宮に仕えるしもべたちであった。エルサレムには、ユダ族、ベニヤミン族、エフライムおよびマナセ族の者が住みついた。」ユダの民がバビロンに捕え移され、七十年後に、ペルシヤの王クロスがエルサレムに帰還する布告を出します。そしてエルサレムでユダヤ人の神の宮を建てなさいという命令を出します。その帰還民が定住して、しばらくしてから書かれたものであります。

歴代誌は、これからこれらの民が、どのようにして生きていけばよいのか、ダビデ王朝にある神の支配を眺め

ながら建て直そうとしているのが、この書物です。彼らは列王記に書かれていた神の裁きをすでに受けました。そしてこれからどのようにして生きればよいのか、改めてダビデの生涯、そしてその後のダビデ家の王の記録を見て、見直していこうというものです。そこで王記にはなかった、新しい側面が歴代誌に数多く出てきます。それは、レビ人と祭司の働きです。ダビデが王であるにも関わらず、祭司とレビ人に対して礼拝を指導したこと、また神殿建設のための材料を調達したこと、それからダビデのその後の王がいかにして主に呼び求め、主に礼拝を捧げたのか、ということが焦点に書かれています。

歴代誌は、捕囚以前の歴史を辿るのですが、その視点は捕囚以後の生活につなげるためのものです。エズラ記とネヘミヤ記において彼らが律法の書を朗読し、再建の神殿において礼拝を再開するのですが、どのように礼拝を捧げるのかの教科書にしているのです。彼らにはすでに、王がいません。帰還した時の指導者は二人いて、総督ゼルバベルと祭司ヨシュアでしたが、ゼルバベルはダビデ家の者であつたけれども、メディア・ペルシヤ帝国の中でユダヤ人を治める総督でしかありませんでした。ですから、基本的に王がいなくなったのです。そこで彼らは、なおさらのこと礼拝を大切にしました。律法の朗読を熱心に行い、そして礼拝によって、神こそが自分たちの王であり、この方にあつて私たちの国があるのだということを強く確認したのです。

ダビデ家の王はいないけれども、ダビデが礼拝を強力に推進し、祭司的な働きにも関わりました。捕囚後の民は、ダビデ家から出てくる王を待ち望みながら、かつ神の祭司の働きをされる方を待っていました。その方がメシヤに他なりません。捕囚後の預言書、ゼカリヤ書で、預言者はこう大祭司ヨシュアに告げました。「あなたは金と銀を取って、冠を作り、それをエホツァダクの子、大祭司ヨシュアの頭にかぶらせ、彼にこう言え。『万軍の主はこう仰せられる。見よ。ひとりの方がいる。その名は若枝。彼のいる所から芽を出し、主の神殿を建て直す。彼は主の神殿を建て、彼は尊厳を帯び、その王座に着いて支配する。その王座のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間には平和の一致がある。』(6:11-13)」大祭司ヨシュアが王冠を冠ったのですが、それは祭司でありながら王になる、あるいは王が祭儀を行なう、というメシヤが来られることを予表していました。

こうしたメシヤ待望が、帰還民の間に生まれて、それが新約聖書にまで続き、イエス様がお生まれになったという流れです。歴代誌がちょうど、新しい時代における神の民の始まりを示すので、系図から始まる福音書的な働きをしているのと同じように、マタイによる福音書も新しい時代、メシヤが到来されたことを示すために系図から始めました。

私たちもある意味、帰還民と同じように生きていると言っても過言ではありません。なぜなら、王なるキリストはこの地上にはおらず、復活されて昇天されました。私たちは、キリストにあつて神に対してそれぞれが祭司となりました。祭司の務めを与えられた私たちが、神の御言葉を中心にして集まり、礼拝を捧げる時に、王なるメシヤのお姿が浮き彫りにされます。そして、イエス様のご再臨を待望するわけです。ですから、私たちは歴代誌を通して、礼拝について多くを学ぶことができますでしょう。

1 A ダビデ家までの系図 1 - 3

系図は3章までは、アダムからダビデ家に至るまでのものとなっています。

1 B 族長まで 1

1:1 アダム、セツ、エノシュ、1:2 ケナン、マハラルエル、エレデ、1:3 エノク、メトシェラ、レメク、1:4 ノア、セム、ハム、それにヤベテ。

系図はアダムから始まります。そしてノアに至り、それから三人の息子に分かれます。創世記 10 章にある系図と変わりません。三人の息子のうち、セムの子孫（17 節以降）が、神が召されたアブラハムへと至ります。そしてアブラハム、イサク、ヤコブの神とされます。系図は創世記にあるものと同じで、イシュマエルの系図も少しあり、エドムの系図もあります。

そして1章では、ヤコブの名前は出てこず、新しい名、神の与えられた名イスラエルが出てきます（34 節）。これからは新しい神の民として生きていきたいという願いが込められています。私たち教会にも、イエス様は新しい名を与えることを約束されました。「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。（黙示録 2:17）」

2 B ダビデまで 2

では2章に行きましょう。2:1 イスラエルの子は次のとおりである。ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン、2:2 ダン、ヨセフ、ベニヤミン、ナフタリ、ガド、アシェル。

イスラエルの十二人の息子から始まり、そして3節からユダに集中します。ユダからダビデが出てくるからです。あの、ヨシュア記でエリコで聖絶のものを取って死刑になったアカンは、ユダの二人の子ペレツとゼラフのうち、ゼラフの子孫だったようです（7 節）。ダビデ家は、ペレツから出ています。

9 節から、ペレツの子ヘツロンの系図が始まります。このヘツロンからダビデまで続きます。2:9 ヘツロンの子として生まれた者は、エラフメエル、ラム、カレブ。2:10 ラムはアミナダブを生み、アミナダブはユダ族の長ナフションを生み、2:11 ナフションはサルマを生み、サルマはボアズを生み、2:12 ボアズはオベデを生み、オベデはエッサイを生んだ。2:13 エッサイは、長子エリアブ、次男アビナダブ、三男シムア、2:14 四男ネタヌエル、五男ラダイ、2:15 六男オツエム、七男ダビデを生んだ。

そして18節から、ヘツロンのまた別の息子カレブの子孫です。ダビデにつながる家系ではない人々です。ちなみに、ここのカレブは、ヨシュアの相棒でヘブロンを取ったカレブとは違います。この系図がずっと2章の最後まで

続きます。帰還民の多くが、バビロンに捕え移されたユダ部族の人たちだからです。彼らがどこからきたのか、その出自を明らかにするためにカレブの系図もはっきりさせています。そして、43 節にはヘブロンの名が、51 節にはベツレヘムの名があります。前者は、ダビデがユダの王になった時に七年半治めたところで、後者は彼が生まれたところ です。

3 B ダビデ家 3

そして 3 章はダビデ家の系図です。1 節から 7 節までにダビデの息子たちとその家族が、10 節からソロモンから歴代のユダの王、エコヌヤあるいはエホヤキンまでの系図があります。エホヤキンがバビロンに捕え移されました。そして 17 節以降は、そのエコヌヤの息子から始まってその子孫が書かれています。つまり、王族がこのようにして残っている、ということです。19 節の「ゼルバベル」は、エズラ記に出てくる、帰還民の指導者の一人の総督ゼルバベルのことです。

興味深いことに、エコヌヤの子孫を新約聖書もつなげています。マタイ 1 章 12 節を見てください。「バビロン移住の後、エコヌヤにサラテルが生まれ、サラテルにゾロバベルが生まれ、」この後もずっと子孫が書かれていて、最後にイエス様の父ヨセフに至ります。したがって、ユダヤ社会の中でイエス様は、正当なダビデ家の末裔でした。しかし、エレミヤ書でエコヌヤからはダビデの世継ぎの子となる子孫は出てこないと言われており、実際には処女でイエスをみごもったマリヤがダビデの子孫になります。

2 A その他の部族 4 - 8

そして 4 章以降は、イスラエル十二部族の帰還民の出自を明らかにするために書き記しています。初めは再びユダ族です。先に話しましたように、帰還民の大半はユダ族でした。

1 B ユダ 4

1 節から 23 節までがユダの子孫が書かれています。そして 9 節に、ヤベツが出てきます。歴代誌には、ヤベツのように、主に願い求める人がことさらに記録されています。例えば 5 章 20 節で、戦っていた者たちが、「助けを得てこれらに当たった」とあり、その理由が、「彼らがその戦いのときに、神に呼ばわったからである」とあります。ほかには出てこないヤベツ、こうした記録ですが、なぜあえて著者がこれを書き残しているか、これを考える必要があります。主は、彼らにご自身の名を呼んでほしいと願われていました。主が、彼らを帰還させてくださいましたが、そこから彼らが神の約束のものを手に入れるためには、消極的であってはならず、へりくだって積極的に願い求めなければいけないことを、教えておられます。神の約束は**無条件**に与えられています。けれども、**自動的**に与えられるものではありません。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つけられます。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。(マタイ 7:7-8)」そして 15 節に、ヨシュアの相棒であったカレブが出てきます。

そして 24 節以降に、シメオン族の系図があります。シメオン族はユダ族の相続地の中に町々があてがわれ

ました。それでユダ族の次に書かれています。27 節に、「彼らの全氏族はユダの子らほどにはならなかった。」とあります。けれども、今のネゲブの一角で栄えて、エジプトに近いところで略奪をしてそこで栄えたようです。39-41 節にこうあります。「彼らは、その群れのために牧場を捜し求めて、ゲドルの入口に行き、谷の東方にまで行って、豊かな良い牧場を発見した。その土地は広々としていて、静かで安らかだった。以前そこに住んでいた者はハム系の人々だったからである。そこで、ユダの王ヒゼキヤの時代に、ここに名のしるされた人々が来て、彼らの天幕と、そこにいたメウニム人を打ち、彼らを聖絶した。今日もそのままである。彼らはこの人々に代わってそこに住みついた。そこには、彼らの群れのために牧場があったからである。」そして彼らはエドムの地のほうにも伸びて、アマレク人の残りの者も聖絶しました。

2 B 東岸二部族半 5

5 章は、ヨルダン川の東岸の二部族半の系図です。初めは、ルベン族です。

5:1 イスラエルの長子ルベンの子孫・・・彼は長子であったが、父の寝床を汚したことにより、その長子の権利はイスラエルの子ヨセフの子に与えられた。系図の記載は長子の権利に従って行なうものではない。5:2 ユダは彼の兄弟たちにまさる者となり、君たる者も彼から出るのであるが、長子の権利はヨセフに帰したからである・・・

長子というものを知る時に、大切な考えです。確かに初めに生まれた男の子が長子に普通はなります。けれども長子の元々の意味は時間的な初めではなく、優先順位の第一という意味です。したがって、十二人の息子のうちで、二倍の分け前をもらったのはヨセフです。彼の子マナセとエフライムがそれぞれヤコブの養子として取られました。つまり、二部族がヨセフに与えられたということです。そこで、イエス様は私たちの長子と新約聖書に書かれていますが、それはイエス様が神の御子で父なる神のいっさいのものを受け継いでおられる方で、私たちは単に、養子にさせていただいたということであります。

そして、著者はヨセフが長子になったけれども、ユダから君たる者、すなわち王、そしてメシヤが出てくることをしっかりと書いています。こうして彼らは系図の中でメシヤの待望をこのように言い表しているのです。そしてルベン族は、ギルアデ、ヨルダン川の東、それからユーフラテス方面にかなり広がって住みました。

そして 11 節からガド族です。彼らもバシャン、すなわちゴラン高原など、広い一体で遊牧をしていました。

そして 18 節以降に、先ほど少し話しましたが、東の二部族半が連合してハガル人と戦って大きな勝利を得た記録があります。5:18 ルベン族、ガド人、マナセの半部族で、盾と剣を取り、弓を引き、戦いの訓練を受けた勇者たちのうち、従軍する者は、四万四千七百六十人であった。5:19 ここに、彼らはハガル人およびエトル、ナフィシュ、ノダブと戦いを交えたが、5:20 助けを得てこれらに当たった。それで、ハガル人およびこれとともにいた者はみな彼らの手に渡された。それは、彼らがその戦いのときに、神に呼ばわったからである。彼らが

神に抛り頼んだので、神は彼らの願いを聞き入れられた。5:21 彼らはこの人々の家畜を奪い去った。らくだ五万、羊二十五万、ろば二千、人十万。5:22 この戦いは神から出ていたため、多くの者が刺し殺されて倒れたからである。彼らはこの人々に代わって、捕囚の時まで、そこに住んだ。

ここに、先ほど話した原則があります。戦いの時に神に呼ばわれました。それで大勝利を収めました。これを神は私たちに望んでおられます。そして彼らは遊牧民ですが、大量の家畜を手に入れました。最後に、「捕囚の時まで」とあります。覚えていますか、アッシリアのティグラテ・ピレセルが 734 年にここを攻め取り、捕囚の民としていきました。722 年のサマリア陥落の前の捕囚です。

そして 23 節からマナセ半部族が書いてあります。そして最後に、今話した捕囚の記録があります。5:26 そこで、イスラエルの神は、アッシリアの王プルの霊と、アッシリアの王ティグラテ・ピレセルの霊を奮い立たせられた。それで、彼はルベン人とガド人、およびマナセの半部族を捕え移し、彼らをハラフと、ハボルとハラとゴザンの川に連れて行った。今日もそのままである。

大事なものは「今日もそのままである」とあることです。つまり、アッシリアのはるか向こうに彼らはおり、ユダヤ人がエルサレムに帰還しても彼らはそこにいた、ということです。後で見ますが、その他の部族はいなくならずに、アッシリアの崩壊、そしてバビロンの崩壊の後に、イスラエルに戻ってきたことが言及されています。多くの人が、「失われた十部族」ということを言うのですが、この歴代誌を読めば間違いであることが分かります。

3 B レビ 6

そして次の部族がレビ人です。レビ人は、詳しくその系図が書かれています。ここからも、帰還民がレビ人の礼拝奉仕にどれだけ情熱を注いでいたのかが、良く分かります。

1 節には、アロンに至る系図があり、アロンにより祭司制度が始まりました。幕屋あるいは神殿で犠牲のいけにえ、聖所で燭台のともしび、香を焚くなど、主の前に出て人々の執り成しをし、また人々の前に出て主の恵みと祝福を宣言する仲介の人であります。そして 15 節で、その祭司の子孫がバビロンに捕え移された、と言うところで終わります。

それからアロン系列ではないレビ人が 16 節から始まります。レビの子がゲルシヨム、ケハテ、メラリですが、三人の息子から出た氏族が、祭司の務め以外の神殿の奉仕に携わります。預言者サムエルもレビ人で、28 節に出ています。

そして 31 節から、ダビデが特別に立てた礼拝奉仕者の名が列挙されています。歌うたいです。「6:31 箱が安置所に納められて後、ダビデが主の宮の歌をつかさどらせるために立てた人々は次のとおりである。6:32 彼らはソロモンがエルサレムに主の宮を建てるまでは、会見の天幕である幕屋の前で、歌をもって仕え、おのおの

その定めに従って、奉仕を担当した。」歴代誌で私たちは、歌うたいの奉仕が活躍するところを見ます。ダビデがなぜ、これまでの幕屋の奉仕にはなかった歌をこのような形で導入させたのでしょうか？詩篇というのは、歌うたいであり、詩篇を彼らが歌ったのです。なぜここまで強調したのか？天が歌で満ちているからです。御使いから歌って主を賛美しているからです。

そして 50 節に改めてアロンの子孫が書かれていますが、ツアドクに至る家系であることを強調しています。なぜなら、祭司職は、エリの息子の悪事によってその子孫エブヤタルで途切れてしまったからです。もう一つの系列ツアドクが受け継ぐことによって、捕囚後も祭司職を続けることができました。

そして 54 節から最後までに放牧地、レビ人が生活のための放牧地がイスラエルの土地に散らばって存在していたことを示されています。

4 B エフライムとガリラヤ 7

そして 7 章には、その他の部族が列挙されています。初めはイッサカルです。次にベニヤミンです（6 節）。イッサカルにもベニヤミンにも優れた軍隊があったことを歴代誌の著者は記しています名二人が一説だけ 3 節にあり、そしてマナセが 14 節からあります。

20 節以降はエフライムですが、他の箇所には見ない逸話があります。7:21 その子のザバデ、その子のシュテラフ。それに、エゼル、エルアデであるが、彼らはこの地の生まれであるガテの人々に殺された。彼らが家畜を奪おうとして下って行ったからである。7:22 彼らの父エフライムは、何日もの間、喪に服したので、彼の兄弟たちが来て、彼を慰めた。7:23 その後、エフライムは、妻のところにはいった。彼女はみごもって男の子を産んだ。彼はその子をベリアと名づけた。その家がわざわざいのさなかにあったからである。

ガテ、すなわちペリシテ人が彼の息子を殺してしまいました。そしてその後に妻との間に新たな子を生まれました。そして系図は 27 節で、あのヨシュアで終わります。

それから 30 節でアシエルAsielの系図があります。彼らにもしっかりとした軍隊がありました。そして 8 章にはベニヤミンがいますが、ゼブルンとダンDanがないということになります。彼らのごく少数しかいなかったのでしょうか。ですから、反対に言えば、これまで列挙されてきた部族は確実に帰還民の中にいた、ということであります。失われた十部族ではない、ということがよくお分かりになったかと思えます。

5 B ベニヤミン 8

そして 8 章は、ベニヤミン族です。7 章の最後の部分にも出てきましたが、8 章で改めて出てきているのは、サウルの話が 10 章から始まるからで、サウルがベニヤミン族だからです。33 節にサウルが出てきて、そしてその

後はサウル家の名前が書いてあります。

3 A 帰還民 9

そして 9 章です。ここで系図が終わりますが、9 章は帰還してエルサレムに住んでいる人々のことが書かれています。

9:1 全イスラエルは系図に載せられた。それはイスラエルの王たちの書にまさしくしるされている。ユダは、不信の罪のために、バビロンに捕え移されていた。9:2 ところで、彼らの所有地である彼らの町々に最初に住みついたのは、イスラエル、祭司たち、レビ人および宮に仕えるしもべたちであった。9:3 エルサレムには、ユダ族、ベニヤミン族、エフライムおよびマナセ族の者が住みついた。

バビロンの捕囚後の帰還民の系図のために、編纂されたということがはっきり書いてあります。ですから、系図は一つの明らかな主張や目的をもって、あるところは詳しく、あるところは大雑把に記してありました。初めに来た人々の多くが、祭司、そしてレビ人であることがここで分かるでしょう。主を礼拝することがこれだけ優先されています。そしてエルサレムには、ユダやベニヤミンだけでなく、北イスラエルの有力な部族、エフライムやマナセもいます。

4 節から 9 節は、部族ごとのかしらの名前が記されています。そして 10 節から祭司のかしらがあります。13 節に彼らの評価があり、「彼らは神の宮の奉仕の仕事に熟練した、力ある人々であった。」とあります。そして 14 節からレビ人のかしら書かれています。

17 節からが興味深いです。「門衛」という奉仕です。まず 17 節から 20 節を読みます。9:17 門衛はシャルム、アクブ、タルモン、アヒマンで、彼らの兄弟シャルムがかしらであった。9:18 彼は今日に至るまで、東方にある王の門にいる。この人々はレビ族の宿営の門衛であった。9:19 コラの子エブヤサフの子コレの子シャルム、その父の家に属する彼の兄弟たち、すなわちコラ人は、その奉仕の仕事につき、天幕の入口を守る者となった。彼らの一族は主の宿営をつかさどり、その門口を守る者であった。9:20 かつてはエルアザルの子ピネハスが彼らのつかさであり、主は彼とともにおられた。

彼らは門の開閉、そして神殿の敷地内に侵入者がいないようにするために立っていますが、その主な目的は聖なるところと俗なるところを区別するためです。そこから汚れたものが入ってこないように細心の注意を払っていました。御使いケルビムが、アダムとエバがエデンの園に入っているのちの木から実を取って食べないように、炎の剣で守っていた、とありましたが、それと似たようなことを行っていたのです。

私たちの体は聖霊の宮であると、新約聖書では言われます。礼拝をするにあたって、私たちが気を付けなければいけないのは、この体、思い、心を聖く保っておくことです。そして汚れたものが入ってこないように、心を見

張っていることです。「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。(箴言 4:23)」そして個人だけでなく、私たちは礼拝においても、自分たちが主だけになっているのか、これに心を留めなければいけないでしょう。これから、門衛の奉仕は多く見ていくことになります。

門衛の務めについて続けて書かれています。ざっと読んでみましょう。9:21 メシレムヤの子ゼカリヤは会見の天幕の戸口を守る門衛であった。9:22 入口にいる門衛として選ばれたこれらの人々は、全部で二百十二人であった。彼らは、彼らの村々で系図に載せられた。ダビデと予見者サムエルが彼らの職責を定めたのである。9:23 彼らとその子らは、守衛として主の宮すなわち天幕の家の門をつかさどった。9:24 四方、すなわち、東方、西方、北方、南方に門衛がいた。9:25 彼らの村々の同胞は、七日目ごとに来て、決まった時から決まった時まで彼らとともにいなければならなかった。

天幕の入口の門衛です。主のところに入っていくところを守ります。そして 24 節には、天幕あるいは神殿の周辺の東西南北の門衛があります。

9:26 その職責では、彼らは、門衛の勇士たちの四人で、レビ人であり、脇部屋および神の宮の宝物倉をつかさどった。9:27 彼らは神の宮の回りで夜を過ごした。彼らには任務が課せられており、彼らは朝ごとにかぎをあげた。9:28 彼らの中のある者は、務めの器具をつかさどった。数を合わせてこれらを運び入れ、数を合わせてこれらを運び出した。9:29 彼らの中のある者は、器具、すなわち聖所のすべての器具と、小麦粉、ぶどう酒、油、乳香、バルサム油の管理を割り当てられた。9:30 祭司の子の中には、バルサム油の香料を調合する者たちもいた。9:31 レビ人のひとり、コラ人シャルムの長男マティテヤは、その職責として手なべの仕事をつかさどった。9:32 また、ケハテ族の彼らの同胞のうちには、並べ供えるパンをつかさどり、安息日ごとにこれを用意する者たちもいた。

門衛の中では、神殿の中にまで入って、祭具の管理などもするレビ人もいました。

そして残り 35 節以降は、改めてサウルに至る系図があります。サウルの子孫も、バビロン捕囚の帰還後、自分たちの町ギブオンに戻ってくることができたようです。したがってダビデがサウル家に示した恵みは、ダビデの死後も続き、実に帰還後にまで至っていたことが分かります。すばらしいですね。

今回は、ダビデの生涯を見ていきます。彼のところに、人々が御霊によって集められます。肉による努力ではなく、御霊によってダビデを中心に、神を礼拝する集団が出来上がっていきます。私たちは、ダビデのような人間の王はいません。そして帰還後のユダヤ人もそうでした。けれども彼らには王がいました。礼拝によって神が臨在されることによって存在していました。私たちが礼拝を中心にして、キリストが実に王となる共同体になるように祈っていきましょう。